

研究ノート： 徐志摩「女子について—蘇州女子中学での講演」

星野幸代・朱芬・楊金娣・李瑾・柘植香・
陳伊静・陸洋・何憶鵠・朴香花¹

0、はじめに

本稿の目的は、徐志摩「關於女子——蘇州女中講稿（女子について——蘇州女子中学での講演）」（1928年12月17日講演、『新月』月刊第二卷第八期、1929年10月に発表）²の抄訳を提示し、徐志摩が当時この講演をした意義、ヴァージニア・ウルフの明らかな影響などを問題提起することにある³。

蘇州女子中学は創立時1912年蘇州第二女子師範学校であり、1923年に省立蘇州女子中学となり、1932年には蘇州第二師範と改称し、中華人民共和国の建国をもって蘇州師範と合併した。

1、講演時期とウルフ『自分だけの部屋』執筆時期—影響関係の謎

なぜ徐志摩はこの女子学校での講演に招聘されたのだろうか。「關於女子」によれば、校長である陳淑が徐志摩を招聘したのだという。徐志摩は当時光華大学、東呉大学で教鞭をとり、さらに既に詩集二冊、散文集二冊、その他翻訳著などを出版しており、新聞の文芸欄の編集者をつとめ、自ら書店と雑誌を主宰するなど、文芸界での地位を確立していた。これだけでも講演者としては充分の活躍である。さらに徐志摩の元妻張幼儀は結婚前、蘇州女子中学に在籍していたから、その縁かもしれない。

後に挙げる訳文〔朱芬 担当〕第二段落で、徐志摩はこの講演の発想の一つが、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）の『自分だけの部屋 *A Room of One's Own*』⁴によることを、名こそ挙げないものの明示しているといつてよいだろう。「ある有名な小説家」がウルフであることは、自分だけの部屋、年に500ポンドの収入、というキーワードから明らかである。ただ問題は、徐志摩がこれをどこで読んだかということだ。ウルフ『自分だけの部屋』とその元になった講演と、徐志摩の講演を時系列で並べると以下の通りである。

1928年10月20日 ウルフ、ケンブリッジ大学ニューナム・カレッジで講演

10月26日 ウルフ、ケンブリッジ大学ガートン・カレッジで講演。

1928年12月17日 徐志摩、蘇州女子中学で講演

1929年10月10日 徐志摩の講演録、『新月』月刊第二卷第八期に発表

1929年10月24日 ウルフ『自分だけの部屋』ホガース社より出版

従って、徐志摩が出版された『自分だけの部屋』を読んでいなかったことは確かだ。徐志摩はこの1928年8月から9月にかけて英国を漫遊していた⁵。詳細は定かではないが、欧州を経て10月末にはインドにいたっていることから⁶、10月27日にケンブリッジで徐志摩がウルフの講演を聴いたとも考えがたい。徐志摩の講演と『自分だけの部屋』の類似性（後述）を勘考すれば、徐志摩はウルフの草稿、或いはそれに近いものを読んだとしか思えない。ではそれをどのように入手したのか。可能性としては、8月中旬徐志摩がブルームズベリー・グループの中心的メンバー、ロジャー・フライと会った時か、ケンブリッジ、キングズ・カレッジを訪問した際⁷、メンバーの誰かと接触したかのいずれかであろう。目下のところ、これ以上は不明である。

徐志摩の講演は、はじめ蘇州という土地への思いと講演に招聘された経緯などを語る。本稿では、「女子について」徐志摩が如何に述べているかに関心を絞っているため、はじめの部分は扱わず、女子について語り始める部分から訳す。

2、抄訳

どうしたわけか、女子についての雑談をすることに思いつきました。女子問題についてではないのです。なぜかという、僕は科学には詳しくないので、女子という不思議な存在を解剖する方法は思いつきません。社会学者でもない、できあいの専門用語をひけらかしながら、恋愛問題を解いたり、結婚生活を改善したりしようとも思いません。また道学者のように、女たちが良妻賢母になろうかなるまいかを責める権威を持つものでもないのです。僕に問題解決や疑問に答える力は何一つ持っていません。僕には自分の意識の流れしか知りません。とは言え、それを支配する力も僕にはありません。霧雨の中、遠山を眺めるのと同じように、ほんやりとした風景しか見えないのです。どこからか差し込んできた光が僕の意識の片隅を照らし、ほんやりしたものをはっきりさせる機会を与えてくれましたが、拙い言葉でこういう繊細な感覚を伝えようとするのは、太い鉄針で細工のこまかい刺繍をするかのように困難の極みです。というわけで、今日ここで弁明したいのは女子というものでもないし、女子問題でもありません。僕自身の意識の断片だけだと思います。

どうしたわけか、考えが女子に辿りついたと先ほど言いましたが、そのわけはというと、いちばんわかりやすいのはやはり女子学校に話に来たからです。しかし、実は、そのほかにもヒントがあります。一つには、この前、本屋の前で某女史の書いた『蠹魚⁸生活』という本の広告を見かけました。今の時代、本の虫として生きていく女子がいるなんて、なんと珍しいことだろうと思いました。三百年間以来、女子の中に良妻賢母も少なくないですし、詩や詞を書く人も多いようですが、本の虫で有名なのは郝夫人の王

照圓⁹ぐらいしかいないでしょう。これは一つで、また、もう一つのきっかけがありました。この前イギリスのある有名な小説家の書いた文章を読みました。婦人たちが著述をしたいならば、少なくとも次のような二つの条件を必要とすると書いてあります。まず第一に、いつでも閉めきったり鍵をかけたりする自由のある自分自身の部屋を持つことです。第二に、年収五百ポンド¹⁰が保たれることです。この小説家は外国の事情を言っているの、われわれと大きな差があるのは当たり前ですが、理屈としては通じるのではないのでしょうか。こんなことを言うと、皆さんからこのような反対の意見を招くでしょう。だって、外国女子とは比べものにはならないわ。あっちのほうが身の回りの環境もよいし、ずっと自由なんだから。いいわ。外国女子のことを持ち出すのなら、まずわが国の男が向こうの男に追いついてから言いなさいよ。 [朱芬 訳]¹¹

しかし、皆さんはとりあえず気持ちを静めて、外国人女性の苦しみに耳を傾けてみましょう。アン女王時代、それより昔はさておき、すなわちわれわれ清朝の乾隆帝時代、才能を持っている貴族の女性たち（平民は言うまでもなく）は書きたくてたまらず詩文を書き上げて、引き出しに詰め込んで虫が食うに任せるしかなく、公然と厳めしく偉い男に見せたりしたら、歯が落ちるほど笑われたでしょう。男は女の「反対党」(The Oppose faction)¹²であるとウィンチェルシー伯爵夫人は言っています。手遅れにならないうちに、女たちよ、学識を見せびらかす者に災いに振りかかるのは自業自得だ、才学はお前たちのものではない！女性が筆を執る行為は泥棒のようなもので、男の嘲笑は耐え難いものでした。イギリス人は開明的だと言われていますが、彼らの多くは『婦学篇』を書いた章実斎氏に似ています。むしろ章氏のように道学者の顔を強張らせて公然と女性の執筆を反対するほうがましでしょう。例えばポーブやゲイ¹³、彼らは文学趣味を持って才情のある女性を「ブルー・ストッキング」と呼んで、彼女たちが家事をよそに、「勝手に書きたくてうずうずしている」（ニューキャッスルのマーガレット¹⁴）と非難しました。また才ある女性の一人は「女は蝙蝠やフクロウのように生き、家畜のように働き、虫のように死ぬ……」¹⁵と憤慨しています。男性の態度はさておき、女性自身の自己卑下もなかなかのものです。ドロシー・オズボーン¹⁶という淑やかな女の作家は、文才のある公爵夫人を言及するや否や腹を立てたのです。彼女はこう述べています。「お気の毒に、この御夫人は少し気が触れていらっしやるわ。そうでなければ本を、それも韻文で書こうとするほど馬鹿なことをなさるはずはありません。私でしたら、たとえ2週間眠れなくても、そのようなことは絶対しないでしょう」¹⁷オズボーン自身思いもよらなかったことに、彼女の本は千百年後も貴重な文学作品として読み継がれて、彼女の方があの「本を書こうとする少し気が触れていらっしやる女」よりもっと目立ち、もっと長く注目されているのです。 [楊金娣 訳]¹⁸

もう少し最近の話をししましょう。百年前に英国にある女性の小説家が現れました、彼

女の地位についてはある評論家が、シェイクスピアに近いジェーン・オースティンだと言っていますが、彼女の生活環境はあなたたちのよりいいとは思えません。実際に彼女のそれは我々現代の女子に及ばないのです。そのうえ、彼女は自分しか開け閉めできる部屋も持っていなければ、毎年の固定収入はいくらもありません。彼女は遠出したこともなければ、知識のある方々に会えるわけでもありません。彼女は家にこもっている一人の娘で、何冊かの本を読むことができただけで、毎日、永遠に静かになる訳がない共同の居間で手紙を書くふりをしながら不朽の名作の原案を練っていました。「女は30分も持っていない」フローレンス・ナイチンゲールはこう語っています。「女は30分も彼女自身の時間といえるものを持っていない。」さらに最近の話をしましょう。ブロンテ姉妹ものんびりした生活を送ったわけではありません。彼女たちはある田舎の牧師の家で生まれ、育ち、そして死んでいきました。彼女たちはせいぜいベランダに出て野外の風景を眺めてみるぐらいです。霧深い空の果てに広大かつ無辺な世界のあらゆる出来事を空想し、彼女たちの色彩も荒波もない生活の中で決して経験できないことの幻想を抱くまでです。彼女たちは自身の卓越した天賦の才能と溢れる熱意、人並みはずれた想像力に迫られ、書かずにはいられなくならなければ、きっと彼女たちは三人の平凡な田舎娘に過ぎず、楽しみのない家の中で憂鬱に死んでいったでしょう。そうだとしたら、彼女たちのことを思いつく者はいるのでしょうか。輝かしい十九世紀は彼女たちと何の関わりがあって、彼女たちは何の得をしたのでしょうか。

言ってみれば、やはり我々の状況は彼女たちのよりましになったのです。清朝の偉大な文人の王漁洋¹⁹、袁子才²⁰、畢秋帆²¹、陳碧城²²はみな婦女文学を提唱した最も功績のある者たちです。彼らに間接あるいは直接教わった女弟子の貢献がなければ、清代における婦女文学について論ずるところがないではありませんか。彼らたちは当時、女子が詩文を作り、学問を学ぶことを仰々しく世に広めることをしなければ、我々のあの『文史通義』の大先生が笑われるほど自らの名誉を踏みつけてまでガミガミ発言することもなかったのでしょうか。彼は婦学の中でこう述べています。

近頃恥知らずの文人が風流人であると自負し、名門の女子を惑わしている。おおよそ演劇なんかの中で演じられている才子佳人を使うのがその手口なり。長江の南では数多くの名門や大家の令嬢たちがその誘惑に惑い、男女の関わりを避けずに自身が女であることを忘れ、名声を博するために詩を詠い、原稿を書いている。このような婦学を学ばずにいる女に、まさか才能があるはずはあるまい。このような邪悪な人に唆されることが徐々に流行りとなっていく世の中は実に憂慮すべし。²³

もし章先生が本日まで生きてこられ、女子が学堂に通い、ひいては男子と共に学び、役所や会社、店に勤め、男子と共に働き、あれやこれやの党に入り、男子と志を共にするなどということを目にしたら、あのお方は憤慨のあまり無残にも空気の抜けた風船のようになってしまわないでしょうか。 [李瑾 訳]²⁴

だから君たちは、イギリスという最も女性の権利が発達している民族でも、女子の解放に関してはどの面をとっても、すべて最近のことなのだと覚えておかなくてはなりません。女子教育の歴史は百年にも満たないし、女性の財産権は五十年前にやっと法律で保証されました。女性の参政権は実現されてまだ十年も経っていません。しかしこの百年来、女性についての努力とその成果は驚くべきものであるといわざるを得ません。百年以上前の人類の文化は完全に男性による成果であり、女性は、貢献はあったとしても極めて限定的或いは間接的であるのがせいぜいでした。女性の中には優れた才能のあるものもいましたし、歴史上に名を残している女性も少なからずいます。特に文芸面では、ギリシアのサッフォーは今でも類まれな足跡を遺しています。中世のヒパティア、エロイーズは匹敵するものがありません。イギリスのエリザベス [一世]、唐代の則天武后、彼女達の傑出した才知と計略には、どんな男でも頭を下げざるをえないでしょう。18世紀のサロンのマダムたちは、何人もの才能と名著を育んだパトロンでした。中国では曹大家の漢書、蘇若蘭の回文体、徐淑、蔡文姬、左九嬪の詞文、武曩の昇仙太子碑²⁵、李若蘭、魚玄機の詩、李清照と朱淑真の詞、明の文氏の『九騷』——どれをとっても万世に照り輝くような類まれな才能の持ち主ではありませんか。

そうはいつでも、人類のもっと広い活動から見ると、女性には何か誇るべきものがありますか。女シェイクスピアや女司馬遷がいますか？女ニュートンや女ベーコンは？女プラトンや女ダンテがいますか。狭義の文芸にしても、女性の成果は丘を泰山と比べるようなものではありませんか。男性が傲慢で、女性が弱気だと責めることができますか。

イギリスないしヨーロッパにおいて、オースティン以前には名を成した〔女性〕作家はいないと言えます。エリザベス朝からフランス革命まで調べて見つけた女性の作品は小詩と物語のみです。中国はというと、清朝三百年近くの間に出た女性の作品は、最近出版された錢単夫人の『清閨秀芸文略』によれば 2312 篇ありますが、胡適之先生の統計によれば、学問に関するものはたった一パーセントだけです。例えば歴史や算数や医学を考証するものであり、それもなんら重要な貢献を為したとはいえ、その他の九十九パーセントはすべて詩詞のたぐいの文学で、それに絶妙なことにはそれらの詩集詩巻の題目は、花鳥風月の風雅を除いては、いずれも謙虚さと恐縮の意味を帯びていて、あたかも彼女達が女子には公然と本を執筆する特権を持っていると敢えていう自信がない現われのようであり、それは正業以外の暇つぶしで何の価値も無いと表明しなければならないかのようです。つまり、刺繡の余技でなければ習字の余技、仕事の余技でなけれ

ば針仕事の余技、化粧の余技、機織の余技でなければ、絹織りの余技（陳円円の職業はちょっと特殊だったので、彼女の詩集は『舞余詞』と言います）、さもなければ焚きつけ、燃えさし、余燼といった常套句で、そうでなければ断腸泪悲苦といった言葉（秋瑾のニュアンスはちょっと違います）なのです。このような状況で、男性は強気で、女性は気弱だと咎めることができますでしょうか。 [柘植香 訳]²⁶

しかし、文化史上において女性が遥かに男性には及ばない状況については種々な解釈がされてきましたが、だからと言って、男性はこのようなことで女のもつ能力が男性のそれよりも劣っていると証明できるはずがありませんし、女性もすべては男性が故意に強要したのだと、こじつけることはできません。女権の遅れについて不思議に思う人は、メアリ・ウルストンクラフトが明言するまでになぜ具体的な女権論がなかったのかをまず問わなければなりませんし、人権論の出現もそれほど昔ではないことを思い出せばよいのです。人の思考能力は奇妙です、時には短期間に新しい知見が次々と跳ぶように発見される。例えば、ギリシアの黄金時代や近代 150 年以來のヨーロッパですが、しかし時には夢うつつのまま、長い期間新鮮味のないまま時が過ぎてゆくこともあります。例えば、ヨーロッパの中世や中国の明朝のように。それが動かないときはまるで冬のようで、すべてが静止し、無機質で、まるで生命力が二度と蘇らないようですが、一旦動き出すと、それはそれで春雷のようにまたたく間に活気のある煌びやかな春が到来します。ヨーロッパでは、アリストテレスからルソー、ひいてはショーペンハウアーまで男女の不平等は当たり前であって、認めない思想家など誰ひとりとしておらず、それを論じるにも値しないし、研究する術もなかったのです。たとえ、とりわけ優れた才能を有する女が何人かいたとしても、わが国ではそれを才女と呼びますが、それはまだ丁寧な呼び方です。長くて派手な羽を生やしている鶏を錦鶏として扱うように、百年前のヨーロッパではブルー・ストッキングと呼びましたが、それはどうしても揶揄の意味合いを免れませんでした。だが、ジョン・ミルの正統で筋が通った婦女を論じる傑作が世間に出回って以来、理論上で女が男に敵わない、あるいは女が男とともに平等の機会や文化社会における生存と進歩を背負っていくことができないといった、種々の謬説と迷信と偏見は、その根拠たるものを一気に失ってしまいました。実際ここ百年、女性たちは同等の機会さえ与えられれば、如何なる状況においても決して男より劣ってはいないことを、既に彼女たちの自力の努力を通して証明しています。人類の未来には偉大なる新たな希望が展開してきています。それは、今後の文化の発展のために必要なのは男女の協力であり、もはや昔のように片方の活躍ではないのです。この百年、他の方面では人類はその誤解、愚鈍、頑固、また迷信などの思い込みから免れないとしても、記念すべき百年余りでもあります。なぜなら、これは女性が台頭し始める時期だからです。政治においても、社会においても、法律と道徳においても、ひいては理論においても、少なく

とも女性は男性と平等の地位を手に入れました。実際、女性のできる職業は日々増える一方ですし、女性が就くことのできない職業なんて想像もつかないでしょう。たぶん、戦場で戦うことだけではないかと思いますが、この職業は将来的に完全に無くなって欲しい、我々も決していかなる状況においても優しい女性が戦闘好きな凶悪者に転じてほしくないと思います。文芸面においても、女性がすでに一角を占めているのは言うまでもなく、この百年の間にその著しい発展は実に驚くほどです。詩人のブラウニング夫人やロセッティやメネル夫人²⁷はすでにその名を馳せています。

まして小説に関しては、女流作家が男性作家を上回る傾向がすでに英米の出版界から見られ、その質に関しても数同様に優れたものです。ジョージ・エリオットをはじめ、ジョルジュ・サンドやブロンテ姉妹、ひいては近代の [K・] マンスフィールド、ヴァージニア・ウルフなど、すべては文学史上に活躍する女流作家たちです。演劇においては、例えば女優のサラ・ベルナル、[エレオノーラ・] ドゥーゼ、エレン・テリーなど、我々にとっては拭うことのできない記憶でしょう。舞踊においては、女性は遥かに男性よりも業績を上げています。イサドラ・ダンカンのような男性なんて想像もできないでしょう。音楽、絵画、彫刻のそれぞれの分野において、女性の活躍が日々増えていく一方であるし、男性の専門分野とされてきた科学と哲学でさえも、教育の普及につれ、女性もそれに力を注いでいます。だから、キュリー夫人のことを思い出せば、それだけで胸を張って堂々とできるでしょう。学問に関して言えば、女性が業績を挙げられない分野などひとつもないのです。 [陳伊静 訳]²⁸

しかしこのような状況は、幾つかの先進国にしても、せいぜい百年間の出来事です。それにしては、何とも芳しい成績をおさめたものです。あと二千年経つと、男性はたぶん女性に対し性の傲慢さを示す度胸がなくなるだろうと思います。将来の女性たちは自分たちのシェイクスピア、ベーコン、アリストテレス、ラッセルを持っているでしょう、まさに帝王の中にエリザベス、武則天がおり、詩人の中に [エリザベス・] ブラウニング、[クリスティナ・] ロセッティがおり、小説家のなかにオースティン、ブロンテ姉妹がいるように。女性がついに男性を完全に越えてしまう日が来るとはまでは予言できないけれども、今後女性の文化に対する貢献は計り知れないほど倍増し、男子が自らの権威が揺らぐのではと危ぶむ日が来るほどになると、信じて疑いません。

しかし、それはもちろん遠い話です。目下の情勢では、とりわけ中国の場合、女性が学問事業における日々進歩の興奮と快い慰めを感じる一方で、阻害の勢力がまだかなり活躍していることをも深刻に感じとれるのです。我々は東方のなかで、ほとんどの事が遅れている。特に女性のほうは、歴史が長いために、習慣が深く根付いている。習慣が深く根付いているため、解放するには骨が折れるように感じます。他のことはさておき、中国の女性はまず何千年も身体上に理性の片鱗もない束縛を耐えてきました。だから向

この解放は思想から出発して、我々はまず身体を解放しなければなりません。わが国の女性の足は昨日解かれたばかりで、胸は開いているところです。

実際に、今の世代の青年は既に身体的束縛を感じるまでには至らないが、不幸にも長期的な圧迫、もしくは束縛が血液と神経の組織の本体まで影響を及ぼすのです。足を例にとると、皆さんが今持っているのは無論しなやかな天足だが、皆さんの血液と繊維の中には、何十代の纏足の亡霊が残っていることは免れないのです。また皆さんの胸は解放されているが、私の知っている限り、若い娘にはどうしてもこのような解放を恥ずべき不便だと思わずには居られないひとがいるのです。だから身体のことだけを言っても、早くも皆さんの次の三、四世代まで完全に解放を遂げて、自然成長の喜びと美しさを恢復することができないかもしれません。身体の面ではそうなっている以上、他のことは言うまでもありません。

それに、女性が必ず妻や母になるのは避けがたいことです。生育一つとっても、男性は憚りなく女性に対して言えるでしょう。「あなたは結局逃れられない。あなたの替わりを、僕にさせるわけにはいかないだろう!」。確かに事実上、元々学問や事業が軌道に乗っていた無数の女性は、妻や母になることが避けがたいために、最後は自分の意志によらず、光栄なる成果への希望を諦めるしかないのです。この障害をすっかり取り除こうとしても、出来ないに決まっています。しかし、現在の様々な発明と社会組織および制度がだんだん合理的になりつつある状況を見れば、元来障害となっていた不便さが最低限まで軽減する日を想定してもよいと思います。計画出産の方法があれば、例えば自ら望む場合のみ出産する、そうしたら一人の女性が人生の何十年間に、いくつかの短い間を確保して、人類への責任を果たすのは容易いのです。そして将来の家庭のあり方もきっと現在とは違って、様々な不必要な精力の消耗が省かれるという全体の流れが見えます。(アメリカでは、新法による共同参加家庭があるように、女性が家を管理し、世話する負担は必ずしも男性より重いわけではない。双方等しく各々の仕事をなすことができます。) だから問題はそこではありません。問題は、女性の心理上の破りようのない母性の頑固さです。それは男性の父性とは違いすぎます。 [陸洋 訳]²⁹

一例を挙げてみましょう。近代の最も有名なダンサーであるイサドラ・ダンカンが、自伝で初めて出産した時の心境を語っていました。彼女が非常にリアルに気持ちを記述してくれたと私は思うのです。妊娠初期に、彼女は生活のいろんな面で不便さを感じていました。本来、彼女にとって、芸術——ダンス——は生命よりも大切なものであったから、出産がもたらした犠牲は本当に意味のないことでした。特に出産中に極大な苦痛を感じた時(彼女は難産でした)、神様が女にこの過酷な義務を担わせることに対し、彼女は強烈な憎しみを覚えていました。それは、出産の時、彼女は死にかけたからです。しかし、子供を生んだその一瞬、そして看護婦がか弱くて芳しい赤ん坊を彼女の脇で添

え乳させたその一瞬、彼女が感じた悦楽、感激、興奮と母性の激発は言葉にできないくらいでした。その時、彼女はこう感じたのです、生命の不思議さと生命の価値——この無上の創造——は確実に全てを圧倒するのだと。そうになると、彼女がかつて命より大切とみなしていた芸術は、急に微小で浅く感じ、彼女にとって関係ないこととなってしまいました。その時、母性の意識が完全に後天的な芸術家の意識を圧倒したのです。神様の勝ちです！これこそ、私は本当の問題点だと考えます。二、三ヶ月の体の不自由ではなく。この根深くて力強い母性はもちろん人生の神秘と美の重要な一部分ですが、同時に、女性のキャリアの発展を妨害する一つの要素でもあります。

だから理論上、男女に与えられたチャンスが完全に平等とは言いがたいでしょう。生まれ落ちてからお互い異なっているのです。どうしようもありません。でも私達はここまでしか言えない。なぜなら、一人の女性の母的人格、母性の実現は、道理に従えば彼女個人的人格や個性の実現と衝突するべきではないからです。もしある女性が、不合理あるいは迷信が基盤となっている社会組織の中に生きているのであれば、恐らく一旦妻、母になったら、この女性は他のことに気を配ることができないでしょう。でもこの場合さえ除いたら、女性は二つの身分を同時に掛け持ちできるはずで。男性の父性は彼の個性を妨害しないのと同様に。例えばダンカンの場合、彼女は強烈な母性（感情が豊かなため）を抱えている女性と言われざるを得ないでしょうけれども、恋愛あるいは生育のために芸術への追求を諦めたことが一度もない。彼女はやはり自分の芸術を完成させました。また、女性としての不便さは当然男性より多いが、それはさして重要な点ではないと考えます。

我が国の新女性は目に見えるくらいのスピードで日々成長しています。数千年の有形やら無形やらの束縛と圧迫から少しずつ魂と体の美と力を解放させています、まるで竹の皮に包まれている筈のように。有形なる障害は多くて強いが、わりと乗り越えやすいことに対し、無形なる障害、つまり心理的な、或いは意識的無意識な障害は、逆にもっと時間と努力を費やしてから、解放される可能性が初めて生まれてきます。客観的に分析すれば、現在、社会中の各要素は我々が新女性の成長に不利です。もう一例、演劇に例えて言ってみましょう。例えばあなたはお芝居の重要さと力を知っており、あなた自身に演劇の才能が備えていることも知っている。だから、自分自身のためにも、社会のためにも、舞台に立たなければならないとあなたは思ってきました。しかしこの時、あなたの邪魔になるものがやってきます。主観面では、例えばあなたの家庭内の保守性と頑固さからの障害。客観面では演劇を協力してくれる適切な仲間または良い機会がこないことなど。そして、仮にあなたがこれらの支障を全部乗り越えたとしても、また新たな難関に立ち向かうことになります。それは、ある役をあなたに演じてもらわなければならないことになったときです。仮に、その役が世間一般的な判断で、悪役ではあるが

芸術表現としては遜色の無い役だし、芸術もあなたを求めているのだとしても、あなたは迷い始めます。ここで実話を話しましょう。最近南国社による「サロメ」の劇では、サロメは貞女でも節婦でもないキャラクターです。兪さんという人物がおり、名門貴族のお嬢様の身分で、この劇の主演を担うことになりました。彼女は目下お芝居の責任だけを考え、様々な困難を乗り越え、やっとステージに立てるようになりました。ある晩、彼女は舞台上で情熱を込めて「ヨハネよ、私はあなたと接吻したい」と叫ぶシーンを演じていて、母親が観客席の前列で怒った目で睨んでいるのをちらっと目にした時、彼女は瞬時に気が挫けてしまったのです。本来熱く力強い声で謳うべき詩句を囁くようにあしらって終わらせてしまいました。彼女は芸術のための勇気を二度と取り戻すことができないと思いました。母親の怒りの視線で、芸術家であった彼女は結局、愛する母に何もかもを委ね、名門貴族のお嬢様に戻ってしまった——芸術は敗北しました。習慣が勝ったのです。 [何憶鶴 訳]³⁰

故に、僕は、この種の無形な阻害力は時には有形のより大きいと言えるのです。さっき言及したのは、現に存在する一つの例に過ぎません。今日女性が前にワンステップ進むには強い決意と努力が要るのです。そうでなければ前に進むどころか、後退してしまうかも知れません。根性、習慣、環境的实力、数々から牽制抑制されています。しかし、未来の完全型新女性の実現に、あなたたち個々人の成功または失敗とともにすべて関連しています。少しでもあなたが何らかの力を出して、少しでもひとつの阻害を破壊することによって、何らかの助けになり、新女性の誕生にいくらか便宜を図ることになります。簡潔に言うと、新女性と旧女性との違いはレベルの違いであって、種類の違いではないのです。新女性になるにしろ、芸術家あるいは事業家になるにしろ、生まれつきの才能をしっかりと育て、個性を実現すべきです。特に、親にとっての良い娘、旦那にとっての良い妻、あるいは子供たちにとっての良い母親であることを辞める必要はありません—これらは必ずしも相反するものではないのです（「必ずしも」というのは、こうした萌芽期にはいろいろな犠牲を免れるか否かは、すべて自ら利益と弊害をはっきり見極めた上での決断にかかっているからです）。旧き観念は紙切れのように厚みもなく、血液循環の活性もない薄っぺらな人間であることを求められるが、新観念では本当に生きている人間、真に迫るような血液、息、筋肉、生命備えた完全な人間が求められるのです。ここで重要なのは完全な——一人の個人なのです。この違いは大きいようですが、そんなにもめずらしい話ではありません。旧き観念では妻や母になる準備をさせ、新観念では妻や母になる準備をさせないというわけではありませんが、その前に一人前の人間になり、自分自身になる準備をしなければなりません。この観点からだ、他のことは無論透視に切り替わっているのです。私から見れば、古代から伝えられた女性作家は皆一つのおもしろい現象を持っています。彼女らの大半が作詩に長け、彼女らが自分

の思いを詠う詩句として書けたと言えるのです。伝説によると、少なくとも女性の文才は大半が一種の身を守る作用があったそうで、例えば今日上海のお金持ちが着るような鉄ベストのようなものです。周南の蔡人の妻が作った「芣苢三章」〔詩経〕から、召南の申人の娘による「行露三章」、衛の国の世継ぎ共柏の妻姜氏の「共姜柏舟」、『詩経・陳風』の「墓門」、〔魯の〕陶嬰の「黄鵠歌」、宋の韓凭の妻の「南山有鳥」、ひいては羅敷女を詠った「陌上桑」〔樂府〕、すべて詩を作ったおかげで男子から罵倒されることを免れることができたのです。また、卓文君は「白頭吟」を書いたおかげで夫の司馬相如は側女を娶らず、扶風の蘇若蘭^{補注1}が回文詩を作ったため夫・竇滔も可愛がっていた側室を追い出しました。唐代には、いったい何人の宮妃が紅葉の上に詩を書いた咎で御所から追い出され、それによって夫君を得たことでしょう（一たび深宮の裏に入りしより春を見得るに由無し 詩を題す花葉の上 寄与す接流の人³¹）その外に、女性の作品の多くが思慕か恨みではありませんか。このように見ると文学は、古代婦女における文学の大半は彼女らの婚姻問題と密接な関係があるように見えます。それが本来の目的だ、そのように言う人もいるでしょう。すなわち、現在の女子が勉学するのはラブレターを書くための準備であって、多くの人が女の子を学校に行かせるのは婚姻市場での売値を高めるためではないでしょうか。このような状況は本をめくるように乗り越えて、改めて新女子が早々に誕生するのを期待します。

このような態度と目標の変化は重要です。旧女子にとっていくらか文章が書けるというのは一種の余計な飾りでした。新女子の学問を求めるのは個性を見つけるために必要な過程です。旧女子の詩作は私的な境遇とその時々感情を書くのであり、新女子の志は男子と共に継承しなお且つ人類全ての文化産業を継承するものです。旧女子の執筆は、才能がない女性を徳とする、という大前提を認めたうえで、顔を怒りで紅潮させながらしたことであり、そのために刺繍や炊事の合間にやったという一流の言い訳をしたのです。新女子の志は、そのふざけた罰あたりの格言に報復し、否定しがたい反証を男性に与えるための努力なのです。旧女子の才能と学問を持つという理想は李易安〔李清照の号〕の早年の生涯—もちろん必ずしも彼女の「被は紅浪を翻し 起来して慵く自ら頭を梳く」^{補注2}のような艶思を指しているわけではありません—風流人に嫁ぐ—貴公子・趙明城のような夫君（頼みに閨房有り学舎の如く、一編を横放し兩人看る）と風流で風雅な暮らしを過ごすのです。新女子—無論我々は彼女らが風流な情がわく男子との出会いを求めるのを許さなければなりません（貴重な宝物は簡単に手に入りますが、恋人は簡単にはいきませんから）、しかし同時に彼女が体と心の優しさをすべて彼女の情人にあげるにしても、彼女の才能と能力は社会と人類に貢献してくれることを期待したいと思います。〔完〕

〔朴香花 訳〕³²

3、小結

総じて、徐志摩はふと思いついて、という語り出しから前半はウルフの講演をほぼなぞるように進めている。例えば、『自分自身の部屋』第4節の固有名詞を殆どインデックスのように取り入れている（楊金娣訳部分）。すなわち、ウィンチェルシー伯爵夫人から語り起こし、「ポーпкаゲイ」がウィンチェルシー伯爵夫人を揶揄した言葉を引き、ニューカッスル公爵夫人のマーガレット・キャベンディッシュに言及し、ドロシー・オズボーンが公爵夫人の著書について非難した言葉を引く。後半で中国古代から明清に至る女流作家及び中国の状況に話を寄せており、そこが徐志摩のオリジナルである。

徐志摩は、ウルフが述べた女性の書きもの乃至ものを書く女性に共通する特徴が、中国の歴代女性作家たちにも当てはまることを指摘している。すなわち、女性の書きものは韻文が多いこと、また執筆する女性は罪悪感をいだきがちであり、男性からの非難を避けるような配慮をしてきたという点である。これはギルバート&グーバーが『屋根裏の狂女』（1970）で論じた女性の書きものの伝統の骨子でもある。徐志摩は1920年代にそれらの骨子をウルフの講演から把握し、中国の女子学生たちに伝える内容として選び取った。この点において徐志摩は今日に通じるウルフのフェミニズム思想を的確につかんでいたといえる。

この他にも、徐志摩の講演は産児制限問題に関する知識人の論争、イサドラ・ダンカンの身体表現の中国における受容、「サロメ」上演をめぐる言説など、様々な観点から資料となるテキストなのであるが、紙幅の関係でまた稿を改めて論じたい。

最後に、この講演を当時の女子学生たちはどのように受け止めたのか、その可能性を一つ挙げておく。この徐志摩講演を聴いた可能性がある有名人に、「中国のキュリー夫人」といわれる物理学者・呉建雄（Chien-Shuiung Wu, 1892-1997）がいる。彼女は1923-1929年蘇州女子中学に在籍し、国立中央大学（現・南京大学）を経てカリフォルニア大学で博士号取得、プリンストン大学やコロンビア大学で教鞭をとった。現在、彼女と共同研究をした後にノーベル物理学賞を受賞した物理学者たちの発案で、台湾に呉健雄学術基金が設けられている。彼女が徐志摩の講演をどのように受け止めたのかは定かではないが、徐志摩の講演が彼女の将来像に影響を与えたとして、呉建雄が米国へ留学したことでその才能は開花したのではないか。換言すれば、徐志摩の思想は、西洋に場を移すことで華々しい成果を挙げたのではなかろうか。

¹ 執筆分担は、星野が翻訳編集及び考察部分（考察の内容は、翻訳の課程での翻訳者全員による議論に基づく）を執筆、翻訳は担当順に朱芬（華東政法大学講師）、楊金娣（名古屋大学大学院国際言語文化研究科D2）、李瑾（中京学院大学講師）、柘植香（名古屋大学大学院国際言語文化研究科科目履修生）、陳伊静（同研究科前期課程修了、会社員）、陸洋（同研究科D1）、何憶鵠（同左）、朴香花

(同研究科 D3)。該当部分の注は基本的に担当者により、適宜星野が追加している。

² 本稿は主として、韓石山編『徐志摩全集』第三卷、天津人民出版社、2005、268-284 頁所収版による。適宜、『新月』月刊（1985 年上海書店影印版）第二卷第八期を参照した。

³ 中国語圏では、詳細な検討はないものの、ウルフの影響が見られる徐志摩作品のうちの一篇であるという指摘はある。楊莉馨「論 "新月派" 作家与伍尔夫的精神契合与文学关联」『南京師大学報（社会科学版）』南京師範大学、2009 年 2 期、2009 年 5 月、13-22. など。

⁴ 1929 年 10 月ホガース社より出版。本稿では San Diego: Harcourt, Inc., 1989. 及び邦訳『自分だけの部屋』川本静子訳（1988 年、みすず書房）を参照した。

⁵ 「徐志摩年表簡編」劉焯編、中国現代作家選集『徐志摩』三聯書店、1994、242-250。

⁶ 「在不知名の道傍（印度）」は 1928 年 10 月 31 日執筆。前傾『徐志摩全集』第四卷、349 頁注①。

⁷ 徐志摩とロジャー・フライとの関係、及び 1928 年 8 月ケンブリッジを訪問した根拠については、星野幸代「徐志摩とケンブリッジ—ロジャー・フライとの交流を中心に」（『言語文化叢書 4 都市と文化』名古屋大学国際言語文化研究科、2005、191-206）を参照されたい。

⁸ 蠹魚（しみ）とは、本来、本の紙面を食って穴をあける昆虫のことを指す。中国の文人は古代からこれを読書好きの表現として使うことがある。例えば、唐の時代の詩人の韓愈は「蠹書虫」（図書の虫）という表現で読書好きの人を表した例がある。現代中国語では、「书虫」（本の虫／本食い虫）という表現も同じ意味で使われている。

⁹ 王照圓、清の時代の経学者郝懿行の妻。訓詁や文学に詳しい。著書『列女伝朴注』『詩経小記』などを出している。

¹⁰ 当時中国貨幣に換算すると六千銀元だが、当時中国の大学教授の年収に相当する。（http://www.360doc.com/content/12/1210/14/777618_253207751.shtml を参照）

¹¹ 前傾『徐志摩全集』第三卷、272 頁 20 行 - 273 頁 17 行。

¹² The Introduction by Anne Finch（第三節）

A woman here leads fainting Israel on:
She fights, she wins, she triumphs with a song,
Devout, majestic, for the subject fit,
And far above her arms exalts her wit,
Then, to the peaceful, shady palm withdraws
And rules the rescued nation with her laws.
How are we fallen, fallen by mistaken rules!
And education's more than nature's fools,
Debarred from all improvements of the mind
And to be dull expected and designed;
And if someone would soar above the rest
With warmer fancy and ambition pressed,
So strong th' opposing faction still appears,
The hopes to thrive can ne'er outweigh the fears.

¹³ アレキサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688 - 1744）イギリスの詩人。ゲイは前傾『徐志摩全集』第三卷 274 頁は「John Gray」としているが、前傾『新月』掲載「関於女子」では「John Gtay」、しかし前傾 *A Room of One's Own* では Gay（ジョン・ゲイ、1685-1731）、イギリスの詩

人、劇作家。

¹⁴ Margaret Cavendish, Duchess of Newcastle-upon-Tyne (1623-1673) イギリスの作家、詩人、自然科学者。1653年、『詩と空想』(Poems and Fancies) という本を出版した。

¹⁵ ニューカッスル公爵夫人の「女性への演説」の言葉。

¹⁶ Dorothy Osborne, Lady Temple (1627-1695) イギリスの随筆家。外交官ウィリアム・テンプレの妻。1652年から1654年にかけてウィリアムへ送った77通の手紙は後に編集、書簡集の見本とされた。

¹⁷ Dorothy Osborne to William Temple (14 April 1653), Letter 17, in Dorothy's Letters, ed. Parker, p.89. 邦訳は岸本広司「ウィリアム・テンプレとドロシー・オズボーン」(『研究集録』岡山大学大学院教育学研究科、第153号(2013)17-27)参照。

¹⁸ 前傾『徐志摩全集』第三卷、273頁18行目-274頁13行。

¹⁹ 王禛(1634~1711) 清朝初期の詩人、学者、文学者。別号は漁洋山人であることから、王漁洋とも呼ばれる。

²⁰ 袁枚(1716~1797) 清朝中期の詩人、散文作家。別号は随園老人。

²¹ 畢沅(1730~1797) 清朝中期の官員、学者。乾隆帝時代の状元。

²² 陳文述(1771~1843) 清朝中期末の詩人。嘉慶帝時代の挙人。別号は碧城外史であることから、陳碧城とも呼ばれる。

²³ 袁枚が嘉慶元年に『隨園女弟子詩選』を出版したことに対する章学誠の抗議文の一部。章学誠は清朝中期の史学者である。字が実斎で、乾隆帝時代の進士で国子監典籍の官職についていた。その著書の『文史通義』や『校讎通義』などが日本でも知られている。

²⁴ 『徐志摩全集』第三卷、274頁13行-276頁1行。

²⁵ 則天武后が古代の周の太子の碑を修復し、自ら揮毫した石碑。

²⁶ 前傾『徐志摩全集』第三卷、276頁2行-277頁13行。

²⁷ 原文「梅耐兒夫人」。19世紀の女性詩人という文脈より Alice Meynell (1847-1922) ではないか。

²⁸ 前傾『徐志摩全集』第三卷、277頁14行-279頁17行。

²⁹ 前傾『徐志摩全集』第三卷、279頁18行-280頁21行。

³⁰ 前傾『徐志摩全集』第三卷、280頁22行-282頁13行。

³¹ 唐代、徳宗の宮人、鳳児の詩。彼女がこの詩を紅葉に書いて溝に流したところ、或る進士が見つめて書き手を慕い、警備の役人に捉えられたものの、詮議の結果徳宗は進士に鳳児を娶わせた。(黒羽英男「唐代の女流詩人」『城西経済学会誌』5(1)、102-110。

³² 前傾『徐志摩全集』第三卷、282頁14行-284頁最後まで。

補注1 晋代の女性詩人。回(廻)文詩は縦横斜いづれに読んでも韻律・平仄が合う詩。その素晴らしさで夫の服役を短くしたという説もある。(『晋書』)

補注2 李清照「鳳凰台上上吹簫を憶う」。